特集 交流の場としての アイヌ文化展示

民博開館三〇周年の際にまとめた「展示基本構想二〇〇七」には、民族学博物館をとりまく状況の変化に則して、双方向・多方向的な交流の場として博物館の再編がもとめられるとある。新しくなったアイヌの文化展示でも、研究者をはじめとする展示の作り手、展示対象の文化に属する人びと、そして来館者の相互の交流と啓発の場をめざした。

「誇りを伝える」のサブセクション。手前の丸いテーブルにはハンズオンの資料を置いている

伝統に基づくあらたな文化の創造

齋藤（さいとう） 玲子（れいこ）
民博 民族文化研究部

時代の変化と展示の方向性

二〇〇八年から始まった本館展示のリニューアルは、「中央・北アジア」と「アイヌの文化」展示場で完結した。両展示場は、開館から二年後の一九七九年に公開されたので、三七年ぶりの大規模な改修ということになる。この間、アイヌ民族とその文化をめぐる状況にはさまざまな変化があった。

とくに大きなできごとは、一九九七年に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（通称：アイヌ文化振興法）が制定され、一八九九年公布の「北海道旧土人保護法」が廃止されたこと。そして、二〇〇八年に国会で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択され、国による総合的なアイヌ政策の推進が始まったことだろう。それまで日本政府は、公式にはアイヌを先住民族と認めてこなかった。みんぱくが開館したころは、アイヌが日本のマジョリティとは異なる独自の文化をもつ民族だと示すことが、まず必要だった。そのため、旧展示では「伝統的な」衣・食・住、生業、儀礼、そして工芸の巧みさをあらわす資料を展示することに重点が置かれた。

新展示に本格的に着手したのは二〇一三年度からである。館内の教職員に加え、アイヌ民族の関連団体・組織等の職員や研究者といったアイヌ文化を担い・支える立場の方々に、展示を検討する会議に入っていただいた。本特集に寄稿いただいた北原、山崎、瀧口の三氏のほか、貝澤和明氏（公益社団法人北海道アイヌ協会）、佐々木利和氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、津田命子氏（元・北海道立アイヌ総合センター、アイヌ服飾文様研究家）、床州生氏（阿寒アイヌ工芸協同組合・木彫家）、野本正博氏（一般財団法人アイヌ民族博物館）（五十音順）である。会議では、「伝統に基づくあらたな文化の創造」を基本コンセプトとして、これまでの展示の優れた手法や資料を活かしつつ、現代における多様なアイヌ文化のありかたを、アート作品や映像などで紹介することにした。

新展示の公開日におこなわれたカムイノミ。新しい展示ができたことの感謝と展示の普及・継承の願い、そして物の神（資料自体）に祈っていただいた

「人」を感じられる展示に

検討会で複数のメンバーから出た意見に、「人の気配が感じられない」「整然としすぎている」「色が少ない」「音がない」「同時代性をあらわしたい」などがあった。これらを改善するために、実体として復元家屋「チセ」のなかとそのとなりの祭壇の前にマネキンを置いた。導入部では「同時代を生きる」というサブセクションで、現代の作家による「人」をモデル・イメージした木彫作品を展示した。この三点の作品をはじめ、複製・復元資料以外で作者があきらかなものは、できるだけキャプションに作者の氏名を明記し、新展示のために収集したものを中心に作者のプロフィールものせた。

また、多くの方々に文化継承の取り組み等の写真を提供いただき、パネルとモニターで紹介した。みんぱくで毎年おこなわれているカムイノミの写真もパネルにした。二台のモニターでは動画も用い、芸能・音楽のコーナーでは歌や楽器演奏を聴ける装置も設けた。

交流の場をめざして

しかし、課題も残っている。検討会議でも完成後の検証でも、民具などが使われる場面や使い方の解説不足という指摘があり、「楽しみ」や「体験」も少ないという意見が出たが、十分に応えることができていない。普及用の小冊子やリーフレットなどを座って読むための机と椅子を設置し、ハンズオン（触れる展示）資料も置いたものの、数は少ない。解説については電子ガイドで補いつつ、ホームページで公開するデータベースを充実させるなど、別のプロジェクトとも連携しながら改善していきたい。

また、一二～二月に開催予定の新展示PR事業「アイヌ展示チアシリカラ！（アイヌの展示をリニューアルしました）――冬のフォーラム二〇一七」では、民話を原作とした人形劇の上演や音楽ライブをはじめ、展示作品の作家による実演やギャラリートークなど、楽しみながらアイヌ文化にふれられるイベントを計画している。アイヌ語研究者を招いてのゼミナールや本館「アイヌの文化」展示チーム教員らによるウィークエンドサロンも予定している。そうした機会に参加される方々からご意見・ご感想をいただけることを期待している。

クマ送り儀礼の祭壇（復元）と祈りを捧げる人（マネキン）

精神文化／儀礼を展示すること

北原（きたはら） 次郎太（じろうた）
北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

みんぱく開館当初のアイヌ文化展示が作られて以来今日まで、アイヌの文化的状況や研究の動向にも大小の変化が起こっている。展示リニューアルにあたっては、以前の展示の優れた点を踏襲しつつ、この間の変化を反映したものとなるよう留意した。

イナウに見る地域性

樹木を削って作り儀礼の際の奉納物となるイナウは、地域により形状や用い方が多様であり、みんぱくでは当初からこの点を意識した収集・展示がされてきた。リニューアルに当たっては展示物を刷新しつつも、この方向性を踏襲することとした。とりわけ千島のイナウは希少であることから、今回も同地方の別資料を展示した。また、道東地方のイナウで、明治期以前に属する資料は少ない。あらたに展示した芽室（めむろ）地方の男女のイナウは、収集が明治後半と古く、イナウが性別をもつ擬人的な祭具であることを示すことにも適した資料である。

儀礼展示の難しさ

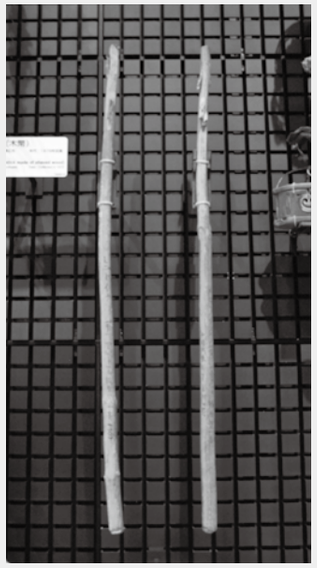
以前の展示では、祭壇と復元家屋を別個に設置し、それらの位置関係もふくめた暮らしの様子は、大型のジオラマで示していたが、無人の復元家屋については「さびしい」という声もあった。リニューアルに際してはジオラマを撤去し、家屋と祭壇を実際の位置関係に即して配置したうえで、それぞれにマネキンを配置することで、人の暮らし・息づかいが感じられる展示となるよう心がけた。

祭壇の前には祈りをあげる男性のマネキンを置き、祈りの所作や祭具の用い方を示した。それに合わせて、屋内でも儀礼の様子を見せることとし、女性がお神酒を注ぐ場面を再現した。

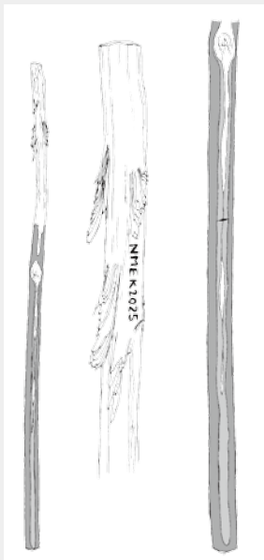
儀礼を展示するうえでの難点のひとつは、それに関する情報が乏しいことである。儀礼の所作は、誰がどのようにそれをおこなうかが、地域や家系によって多様である。いっぽう、それに関する情報はごく限られている。これらの家屋と祭壇は、沙流郡平取町（さるぐんびらとちょう）二風谷（にぶたに）の萱野茂（かやのしげる）氏を中心に製作されたものであることから、マネキンの仕草も同地方のものを再現することとし、萱野氏の著作中の写真を元にポーズを決めた。

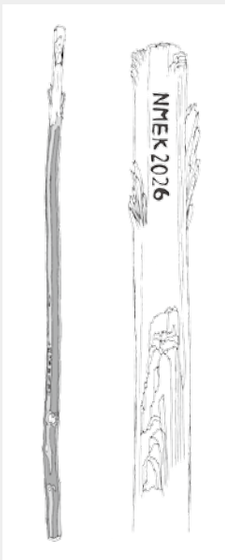
呪術と他界観

新展示には、あらたに他界観、シャマニズムと呪術に関する要素を加えることとし、死者用の装束や墓標の複製、病気治療具、近年収集されたシャマンの太鼓と木製守護神像などを展示した。展示の構築作業は、研究上の課題を再認識する機会でもある。リニューアルによって浮き彫りとなった課題や来館者の反応も検討しつつ、調査・収集を進めたい。



あらたに展示した芽室地方の男女のイナウ
左（男性）：K0002026、右（女性）：K0002025





右写真、芽室地方のイナウの詳細図
画・北原次郎太

民族学博物館とアート作品

山崎（やまざき） 幸治（こうじ）
北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

文化展示のなかでのアート作品

現在、世界各地の民族学博物館での先住民に関する展示において、アート作品は欠かせない存在となっている。今回のアイヌ文化展示のリニューアルも例外ではなく、伝統工芸品に加えて、いわゆるアート作品も複数点展示されている。なぜアート作品が展示物として選ばれるのであろうか。

その理由としては、複数の要因が考えられる。そのすべてを列挙することはできないが、まず、博物館と美術館との関係性についての議論の深化により、展示のスタイルが変化してきたことが挙げられる。そこではモノを、当該の民族文化を理解するための資料としてのみとらえるのでなく、個人の作品としてとらえようとする。展示物に付されるキャプションに「民族集団名」だけではなく「作家名（個人名）」がしるされるようになってきたことは、このことを象徴的にあらわしている。

次に、工業製品の普及により物質文化が世界的に均一化してきている現代において、モノだけによる民族文化の紹介が困難となり、同時に、アイデンティティといった人間の内面や、現代に生きる先住民からのメッセージを展示に盛り込むことが求められるようになってきたことも要因として挙げることができるだろう。そして、そのようなメッセージ性を「作品」という名のモノに込める人びとがアーティストとよばれる人びとであり、博物館は、彼らのアート作品をとおして、人びとの内面や先住民からのメッセージを展示しようと試みる。アーティストにとっても、自らの作品が博物館に展示されることが、何らかのメリットとなることが多いことも見逃すことはできない。その意味で、先住民の展示にアート作品が展示されること自体、博物館と先住民との交渉の現時点での結果といえる。

展示場入り口で来館者を迎えるサブセクション「同時代を生きる」の３つの木彫作品

時代を映し、生まれ続けるアート作品を

とはいえ、これまでの民族学博物館でのアート作品の展示では、各民族の伝統的なデザインをアレンジしたものなど、観覧者がすでにもっているイメージとの連続性がわかりやすいかたちで担保されているアート作品が選ばれ、展示されてきた傾向がある。筆者は、それらのアート作品の方向性を否定するものではない。なぜなら、伝統は永遠のテーマだと考えているからである。また、先住民自身が観覧者のもつイメージに近づき、それをズラしてみせること自体がアートとなっているからである。しかし、同時に、そこにある種の限界を感じ、あらたな刺激を待ちわびていていることも事実である。

アートは、観る者へ訴える強い力と批評力をもち、その時代を映す鏡である。今回リニューアルされたアイヌ文化展示のアート作品も、継続的に展示替えをおこない、また、次々と生まれてくるアート作品を収集・展示・保存していくことが、民族学博物館には求められているのではないだろうか。十数年後、現在からは予想もできないモノやコトが、アート作品としてアイヌ文化展示コーナーに展示されていることを期待している。

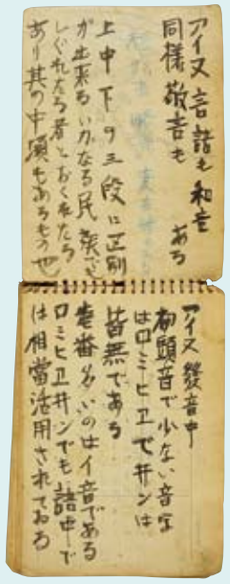
「伝統」と「現代」のあいだで

瀧口夕美
編集グループSURE

アイヌに関する資料が閲覧できるコーナー。左奥には「ユカル伝」や「アイヌ単語集」が展示されている「ことば」のコーナー

鍋沢元蔵「ユカル伝」1954年筆録

わたしは東京で、月に二度、アイヌ語をアイヌの子どもたちに教えている。そこでは、毎回、プリントを配る。アイヌ語をホワイトボードに書き、みんなでそれを読む。しかしそれらは、もともと、文字をつかわずに伝えられてきたことばだ。歌や踊り、おしゃべり、たくさんの物語、祈りのことば、あいさつのことば、おまじない。人間だけでなく、カムイの声や、自然の音に満ちた環境での暮らしを、アイヌ語から感じる。わたしの授業は、それと比べると、どこか焦っているようであり、ことばに接する態度が、せせこましいようでもあって、もどかしい。


山本多助「アイヌ単語集 4号 ユよりンまで」1943年

ある。時代が変わりつつあるなかで、どうやって自分たちのことばを残していくか。山本多助は「アイヌ単語集」のなかで「アイヌ発音中、初頭音で少ない音字はロミヒエでキンは皆無である」と断言する。鍋沢元蔵の「ユカル伝」をしるすカナ文字は、次々とあふれるようにページをうめつくす。二人のエカシに共通するのは、自分のもつことばを深く理解する思索であり、同時に、そこから一歩外に出て、別の言語の使い手の立場にたち、客観的にしるす力だと思う。

時代の流れのなかで

縦長の展示の順路を歴史の時間の流れとして見ると、中間のテーブルのある位置で、わたしたちアイヌはさまざまな変化を経験した。アイヌはその時代時代で日本やその周辺の文化を取り入れ、あらたな生活スタイルをつくりながら暮らしてきた。その大きな画期が、文字の使用だ。伝統から現代にぱっと切り替わったのではない。そのあいだには、人びとの多岐にわたる努力と葛藤がある。

近ごろでは、「もう伝統的な姿で暮らすアイヌはいないのだから、アイヌ民族はいない」という人もいる。しかし、このテーブル席から展示をながめ、資料に触れて、さまざまな観点から、アイヌに起こったことを知って欲しい。

エカシの文字が伝えるもの

新しいアイヌ文化展示では、前半部に、チセがあり、伝統的な装飾品や衣類、宗教儀礼の道具、農具など、生活のなかで使われたものが展示されている。後半は、それらの伝統を受けつぐ人の手になる現代の工芸品や、先住民族の権利に関する歴史を伝える。

展示の前半と後半のちょうど中間あたりに、椅子とテーブルが置かれた。そこには、本やアイヌ語のテキスト、より詳細な資料にアクセスするためのガイドなどが置かれている。

テーブル席のすぐ近くには、エカシ（祖父や高齢の男性を、敬意をこめてよぶ言い方）たちが書き残したアイヌ語の展示が

伝統家屋「チセ」の再生

齋藤玲子
民博 民族文化研究部

チセを活かす

「アイヌの文化」展示場の中央にどっしりと構える復元家屋。アイヌ語でチセとよばれるこの家は、萱野茂（一九二六―二〇〇六）氏はじめ北海道沙流郡平取町二風谷の人たちの手によって、一九七九年の展示公開に合わせて造られたものだ。新しく造ったとはいえ、伝統的な素材と技法にこだわって復元したもので、貴重な資料である。製作にあたった方々のことを思うと、新展示ではあまり手を加えずに、しかし、チセを活かすにはどうすればよいか、議論を重ねた。

以前は、チセのとなりに一九二〇年代ころの二風谷の家の周辺を再現した一〇分の一模型が展示されていた。新展示は現代のスペースを増やすために、これまでの展示資料の縮小や撤去が必要だった。悩んだ末に、この模型は展示から外すこととし、少し離れた壁際に展示されていたクマ送り儀礼の祭壇をここに移した。二風谷ではチセの東側の窓に面した場所に祭壇が設けられるので、本来の配置にしたのである。チセのなかと祭壇の前にマネキンを置き、儀式の様子を再現した。また、チセの前にモニターを設置し、建築時の写真や、萱野氏によるカムイノミ、萱野氏と大塚和義名誉教授との対談の動画を流すことにした。

何かを学ぶ日となるように

そうして、二週間後に公開を控えた三月三日、委託のカメラマンが完成したところから記録写真を撮っていたときのことである。照明の光を和らげるためにハロゲンランプの前に垂らしていたトレーシングペーパーが熱で発火し、それがチセの入口の茅に燃え移った。展示作業中で人手が多かったため、消火器とバケツリレーの水で消し止め、焼失した部分はさほど大きくなかった。しかし、火種が残っている危険性があるため、入口の屋根の茅はすべて撤去した。偶然にもその日、アイヌの衣類の調査のため北海道から来られていた人たちのなかに、チセの建築に携わったこともある方がいらしたため、安全かつ手際よく作業をしていただけた。本当に心強く、感謝に堪えない。

屋根の茅を撤去する際には家財道具や儀礼具をすべて運び出し、萱野志朗氏にチセコロカムイ（家の守り神）に祈りを捧げていただき、いったん別の場所で保管し、清掃後、再展示にも立ち会っていただいて元に戻した。2016年4月

すぐに館内に緊急対策部会が作られ、対応が協議された。消火剤が大量に飛散していたため、アイヌの文化展示場を含む北ブロックを閉鎖し、一部の展示資料は外して、全面的に清掃をおこない、再展示をするために、公開は三カ月延期となった。

現在のチセの展示。奥のロルンプヤㇲ（上座・神の窓）から、祭壇が見える

萱野茂氏の子息である志朗氏らに状況を見ていただいたうえで、チセの修復について相談をした。焼失を免れた母屋にも消火剤がかかっていたので、屋根の茅はすべて外し、当面は骨組みが見える状態で公開することとし、茅（ヨシ）やシナノキ樹皮の縄を準備していただき、来年三月に全面的な葺き替えをすることになった。

今回の失火では、大切な資料を損傷させてしまい、多くの方にご心配とご迷惑をおかけしてしまったことに心が痛む。しかし、関係者のなかに「何かを学ぶ日になるようにと、カムイがそうしたのかと思います」とことばをかけてくださる方もいた。全面的な葺き替えをするこの機会に、記録を撮りつつ、チセについてしっかりと勉強させていただきたい。

アイヌと海外の先住民

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ）
民博 研究戦略センター

カナダ極北地域のクージュアック村で日本とアイヌ民族について説明する長谷川由希さん。2006年夏。提供・Makivik Corporation

認知された日本の先住民

この五〇年あまりのあいだに先住民ということばが世界的に人口に膾炙（かいしゃ）するようになった。先住民とは、現代の国家のなかで政治経済的な主流派である人びとが到来する以前からその土地に住んでいたが、現在ではその社会のなかで政治的に弱者の立場にある人びとの総称である。

一九六〇年前後に米国で盛んになった黒人による公民権運動から刺激を受けた米国先住民が権利運動を展開したことが契機となり、世界各地で先住民運動が盛んになった。国連は一九九三年を国際先住民年と宣言し、その後、積極的に先住民運動を支援し、先住民の政治的地位の向上に尽力するようになった。この時期にアイヌは日本の先住民であると国内外で明確に認知されるようになるとともに、国境を越えた先住民間の交流も盛んになった。

国際交流するアイヌ

一九九〇年代後半には二風谷（にぶたに）のアイヌはカナダ国ブリティッシュコロンビア州アラートベイに住む先住民クワクワカワクゥとのあいだで青少年の相互訪問を始め、白老（しらおい）のアイヌはフィンランドのサーミと交流をおこなった。

こうした動きを受けて、本館も二〇〇五年一月に先住民の社会運動に関するシンポジウムを開催した。このときに、カナダ国ヌナヴィク地域のイヌイットの政治リーダー、モントリオール在住の都市イヌイットの生活向上運動の指導者、北海道で暮らすアイヌ文化の継承者、関東在住のアイヌを招聘（しょうへい）し、当事者が中心となってイヌイットとアイヌの生活、政治的な状況、文化継承問題を検討した。このシンポジウムで意気投合したイヌイットが翌年の夏に二名のアイヌをカナダのヌナヴィク地域とモントリオールに招待し、狩猟や共食など生活体験を含めた文化交流をおこなった。

このような海外の先住民との相互交流・体験をとおして、アイヌは世界各地の先住民の政治的・文化的な状況を知り、自らの現状を認識し、将来を考えるための参考にするようになった。アイヌの交流の輪は、いまやオーストラリアやニュージーランド、ロシア極東の先住民にも広がりつつある。現代のアイヌは海外の先住民と積極的に意見交換し、世界の先住民の一員として自らのみならず世界各地の先住民の政治・文化・経済的な状況を向上させるための活動に参加しているといってよいだろう。

アイヌと世界の先住民との交流について解説するサブセクション「世界をひろげる」の展示

国立アイヌ民族博物館の設立

佐々木 史郎（ささき しろう）
国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹

ポロト湖畔のチセ（アイヌの伝統的家屋）。このチセが建つ一般財団法人アイヌ民族博物館が有する博物館機能の一部は、国立アイヌ民族博物館に継承される予定である

民族共生の象徴空間

二〇二〇（平成三二）年の開館を目指して、国立アイヌ民族博物館の設立準備が進められている。この博物館は北海道白老郡白老町に設置される「民族共生象徴空間」の中核施設のひとつであり、アイヌ民族の文化振興、文化継承、そしてアイヌ文化の調査・研究・教育・普及活動の国際的なセンターとなることが期待されている。

二〇一五年に策定されたこの博物館の基本計画ではその設立の理念を次のようにうたっている。

「この博物館は、先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」（文化庁ホームページより）。そして、この理念を具現化するために、アイヌの歴史・文化の正しい知識の提供と理解の促進、その知識をもつ次世代の博物館専門家の育成、その調査・研究、博物館情報ネットワークの構築の四つのミッションをかかげる。

相互交流の場として

現在、この基本計画にもとづき、建物と展示の基本設計がおこなわれている。

建物については、白老のポロト湖周辺の自然、景観をそこなわない高さ、形状、設備をもつものとし、火災、地震、津波、浸水などの被害を回避するための対策を十分にとることを基本としている。それと同時に入館者にポロト湖周辺の美しい風景を楽しんでもらうための設備も設ける。

展示については、国内外の多様な人びとに、アイヌ民族の歴史や文化を正しく理解してもらうために、それらを総合的、一体的に展示することを基本方針としている。展示は総合展示と特別展示からなり、前者はさらに基本展示、テーマ展示、シアターにわかれる。基本展示はこの博物館の中核的な存在で、アイヌの人びとが自らの文化を紹介するという形で、「私たちの世界（信仰）」「私たちのくらし」「私たちの歴史」「私たちのしごと」「私たちの交流」「私たちのことば」という六つのテーマを設けた。ただし、基本展示といえども展示資料の入れ替えやテーマ構成の変更など不断の展示更新をおこない、繰り返し来館しても常にどこかで新しい展示が見られるようにする。

ポロト湖に沈む夕日

みんぱくの展示リニューアルから新しい博物館の設立へ

今年の三月まで民博の教員であり、アイヌ展示プロジェクトチームの一員としてそのリニューアルにかかわってきた。その基本方針のひとつに、同じ時代を生きる人びとの姿を伝える展示というものがあり、それに基づいて現代のアイヌの人びとの姿をより多く伝える展示となった。四月から国立アイヌ民族博物館の設立準備に従事することになったが、このリニューアルの精神は新しい博物館の展示にも生かしていこうと考えている。